2024年8月4日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神様が、負けた

［創世記32章23～32節］

その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」　「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。

[1] 「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブの神である」

 今日は先週の続きですが、ヤコブ物語でも特に重要な箇所だと言われている32章をご一緒に見て行きたいと思います。（来週は神学生がお話下さるので）。

　ヤコブの人生というものを考えると、彼は確かに足りない点や自己中心と言われても仕方がない点など多く持っていると思います。しかし聖書は、そんなヤコブをどうしようもない奴だと言っているのではありません。聖書の神は、ご自分のことを語る時にこのように言われました。―「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブの神である」(出エジプト3:6)と。それはただ人間の歴史を貫いて‟わたしは神である”と言っているというよりも、良い点もあれば足りない所、欠点もあるそのような一人一人にとって、‟わたしは神なのだ”と言っていると言って良いと思います。つまりそれは、私たちにとっても聖書の神は、真の神様なのです。主は、欠けだらけであり、裁かれても言い訳が出来ない私たちにも真剣に、真実に関わって下さるお方なのです。そのことを今日の箇所は語っていると思うのです。

[2] 神様への体当たり、神様からの体当たり

　ヤコブ。彼はある意味、自分の人生設計が壊された人、と言えると思います。出生は双子でしたが、父親イサクは兄のエサウを愛し、母嫌リベカはヤコブを可愛がりました。ヤコブは、兄に迫って長子の権利を奪ったり、母親の言葉にも乗せられて、父イサクから、兄エサウに行く筈の祝福をかすめ取って、エサウの激しい怒りを買うことになりました。一緒に生活することは出来なくなり、はるか遠くの親戚の家に送られる羽目になったのがヤコブです。私は先週『小さな死を生きる』という題のお話をさせて頂きましたが、ヤコブは旅の途上の荒野の中でもう死んでしまいたいと思ったこともあったと思います。しかし、そのヤコブの人生に、夢の中で神様は天から地上につながる階段を見せ、そこに天のみ使いが現れて、彼に「わたしはあなたと共にいる」「必ずあなたをこの土地に連れ帰す」と御声をかけて下さいました。どんなに慰めと励ましを頂いたことか！と思います。

　29章から31章に記されていることはその後の彼の人生ですが、伯父ラバンの家に着き、ラバンの娘と結婚もすることになるのですが、彼の人生は、このラバンに振り回されるような人生になってしまいました。結婚まで7年ただ働きをしました。にもかかわらず、ラケルと結婚するためには姉のレアも妻としなければ許さない、しかもあと7年働けという条件でした。彼はその通りにしました。その後も6年間家畜の世話をしました。都合20年です。彼はもういい中年になっていたでしょうね。（この辺りは29章～31章に細かく描写されています）。

とうとうヤコブは、妻や子供たち、家畜と一緒に故郷に変えることを決意します。それを「ヤコブは逃げた」と言って、ラバンが追いかけてくるのですね。その激しいやり取りも31章にありますが、何とかヤコブはラバンの所から離れることが出来ました。そして、故郷へと向かうのです。それは何を意味するかと言うと、あの兄エサウとの再会ということです。初めにヤコブは兄が住む地に使いを遣わして様子を探るのです。するとこういう報告を聞きました。「兄上様の方でもあなたを迎えるため、四百人のお供を連れてこちらにおいでになる途中でございます」（32:7）。これにヤコブは恐れを抱いたのです。あの殺意を持っていたエサウが400人を連れて向かってきている。これは大変だと思った。結局彼は色々考えた末、このような行動をとりました。32章23節です。―「その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った。」

このあと聖書は、「そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した」（25節）と書いています。彼の人生の中で、これがハイライトです！頂点だと思います。この「何者か」は神ご自身と言っても良い、神様の使いでした。その者とヤコブは夜が明けるまで格闘したというのです。これはヤコブにとって救いでした。彼の、神への体当たりですね。そして又、神様からの体当たりです。がっぷり四つに組んだ組打ち、レスリングみたいなものですが、これこそ、ヤコブの涙ながらの祈りだったに違いないと思います。どうでしょう？私たちは、人生の危急や試練に察した時に、自分の中に逃れてしまわないでしょうか？私自身本当にそう思うのですが、気持ちが萎えてしまうと、何か成り行きに任せたくなってしまうのです。疲れてしまうから。でも、それは不信仰でした。それだと、「運命」に支配されることを良しとすることになってしまいます。そして「俺が、私が、結局悪いのだから」と開き直る。そうだと「夜」のままです。そうではなくて、あなたと、私たち一人ひとりと、夜が明けるまで徹底的に関わって下さる方が私たちにはいらっしゃるのです！ある牧師は言いました。この組打ちは、神と顔と顔を合わせて、その息を感じること、あの人間創生の再現のようなものだと。「祈り」とは本当はそういうものじゃないでしょうか？その意味じゃ、私は観念的な祈りばかりしているな、ヤコブのような体当たりの祈りをしていないな、と思いました。

[3] あなたが与えて下さる「祝福」を！

この祈りの激しさ、真剣さが私たちの中に欠けているとすれば、それは私たちが神様、主イエス・キリストをどこか絵空事のように思ってしまっているからではないか、そんなことも思いました。最初に申しましたように、ヤコブは欠けだらけの人間です。でも先週のあの天の階段の出来事も通しながら、神様の方から彼に橋をかけて下さった、それを彼は知ったのだと思います。だから伯父ラバンのもとにあっても20年間忍耐出来た。神は自分を知っていて下さっているのだ。しかし、彼の最大の心の痛みは、兄エサウとの確執でした。そんな彼に、組打ちをしようと、ヤコブにとことん付き合ってくれる存在があった。そして、この方は、この組打ちに負けて下さったのです！神様が負ける？どういうことでしょうか。ヤコブを負かすことは難しくなかったと思います。しかし神様は、私たちを呪ったり、叩き潰す方ではなく、祝福するお方、生かすお方です！その愛の故に、敢えて自らの力を制御する「自由」をお持ちの方です。…だから「十字架」なのだと私は思いました。「十字架」は、人間の罪が勝って、神が敗北したことだと人はいうかも知れない。しかし、あの敗北こそが、神様の勝利でした。神様の勝利、それは、罪人である人間・私たちをとことん愛することです！私たちの愚かさ、狡さ、残酷さ、冷酷さ、或は正しさ、それらを全部主イエス様は十字架で背負って下さって、私たちの身代わりとなって下さったお方ではありませんか！…私たち、このお方に心動かされない冷めた信仰者になってしまってはいないでしょうか？

ヤコブはこのがっぷり四つに取り組んで下さっている神の使いに言いました。まずこの神の使いが 「もう去らせてくれ」と語ったその求めに、ヤコブは「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」（32:27）と言いました。これは素晴らしい言葉だと思います。私たちもそう神様に言って良いのですね。ヤコブは「本物の」祝福が欲しかったのだと思います。これ迄自力や騙すような形で得た祝福では、もう自分は立っていられません、ですから祝福して下さい！と詰寄っているのです。その求めを神様は良しとされました。ヤコブは、腿のつがいが打たれ、足を引きずるようになりましたが、それは、自分に神様が触れて下さった徴・証しとなりました。私たちも何かそういうものを持っているのではないでしょうか？自問したいところだと思います。

神様が負けて下さったここで、ヤコブは新しい名を与えられました。「イスラエル」、それは 「神は戦い給う」とか、「神は治め給う」というような意味だそうです。「神様」が主体なのです。私たちも実は神様によって、新しい名が与えられています。「クリスチャン」つまり「キリストの者」という、私はもう神様にキリストにむんずと捕らえられている者なのだ、と言う意味の名前です。ヤコブの不安の夜は去り、「太陽が彼の上に昇った」（32節）とあります。キリストに繋げられた私たちも、既に、神様の赦しと祝福の光の中に歩み始めています。

あの星野富弘さんの詩ですが、「れんぎょう」というモクセイ科の花の水彩画につけたものです。― 「わたしは傷を持っている。でもその傷のところから、あなたのやさしさがしみてくる」。 お祈り致します。

主なる神様、今日のみ言葉をありがとうございます。「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」とヤコブは言いました。私たちも直接見たことはまだありませんが、神様の顔を知らされています。私たちに真剣に関わって下さるお方、イエス様が、私たちを見つめ、そして私にぶつかって来いと招いていて管合っていることを信じます。これから行われる主の晩餐式を通しても、私たちを祝福したくてしようがないあなたのみ招きが今日もあることを深く悟らせて下さい。

8月に入り、厳しい暑さが続いています。肉体の健康もですが、どうか私たちの内なる人を支えて下さい。「いつも喜びなさい、絶えず祈りなさい、どんなことにも感謝しなさい」と言われる通り、いつもあなたの御顔を仰がせて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。